

氏名	柯 毓珊
ヨミガナ	カ イクサン
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第539号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉 未来の機械世界の合成と分化
	〈作品〉 未来都市シリーズ
	版画構成元素
	〈演奏〉

## 論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	三井田盛一郎
（論文第1副査）	立教大学	名誉教授	（）	宇野 邦一
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	O J U N
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	シュナイダー ミヒャエル
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	八谷 和彦
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

## （論文内容の要旨）

## 第1章 感性的な身体

私の制作の原点は病気で手術を受けたことだった。人間というものは二分法で生理と心理に区別できるのではなく、それぞれが重畳しているものである。身体は生理と心理という分別で考えるより、全てで一体なものとして考えるべきだろう。身体は毎日同じことを反復しているという発想から、私は身体を巨大な都市として想像した。血液は血管を通じて流れ、各器官を通じて身体中のいたるところへ移動する。それによって活動できることは、「人間」も「都市」も同じシステムではないだろうか。都市全体のなかの「人」、「交通と運輸」、「場所」という元素を身体に例えると「血液」、「血管」、「器官」、「体」になる。

## 第2章 親愛なる版画

## 第1節、版画から自分まで

## 第2節、版画、現代のイメージになる

## 第3節、版画における思考

版画という制作手法は、印刷や転写などの技術により、同じものをより簡単に素早く複製することができる。「版画」という媒体での作品制作では、印刷の前の構想と準備工程、印刷中の身体リズム、印刷後の整理整頓と完成品の確認があり、そこで人間の身体は機械に変身する。版を利用して制作する過程は、脳内のイメージを再現することと、自己を繰り返してやり直しながら再現することの循環である。

## 第3章 未来世界の構図

われわれの生きる巨大な時間は過去、現在、未来によって構成されている。生きているわれわれは現在し

か感じるができず、過去のことは先人たちにより残された手がかりによって推測できるが、未来のことは現有の資料に沿って仮定するしかない。

#### 第4章 線で構築したパラレルワールド

私の作品は漫画作品から「線」の影響を受けた。作品の原稿は線を基本として構成している。一本の線は四角い基盤になり、その基盤の中身にはまた細い電子回路が入っている。私は線で脳内のイメージを描き出すが、機械の外装的なことを考えるよりも、線と線の繋がりや重なり合いを重視している。各機械装置は重なり合い、連結していて、点（単体の機械）と点（単体の機械）は線によって連結しながら拡張していき、そこには始点も終点もない、常に変化しつづける機械都市である。

#### 第5章 積み重ねたものが内化の鉱石になる

##### 第1節、原石とその物語

##### 第2節、過去から未来における鉱山

作品制作の世界はアニメーションやサイエンス・フィクション小説、映画と同じく、想像に限りがない世界である。私に影響を与えたSF小説（倪匡《玩具》、アシモフのロボットに関するシリーズ）、SF映画（『アイ、ロボット』、『アイランド』）を紹介する章である。一方、リアルな世界で存在している軍艦島を例としてあげ、百年前からいまに至るまで、また現在からこの先の時間までが連結している実例である。

#### 第6章 過去からの贈り物

##### 第1節、未来派

##### 第2節、メタボリズム

##### 第3節、二十一世紀の作家

私が興味を持っているアイデアやモチーフを扱っている作家たちを、時代順で紹介する章である。

#### 第7章 機械と人間の化学作用

われわれは機械を操作して互いに交流・会話している。その「使う」「使われる」という関係は、かならずしも人間が決定権をもった「主」、機械が道具として使われる「従」であるという主従関係にあるとは限らず、時には機械がくだす判断に人間が従うこともある。

#### 第8章 ロボットの物語

現代の人間はロボットや義肢、ペースメーカーなどの医療機器を身につけた人に触れる機会が多い。義肢や内蔵を模した医療機器、合成音声装置などの病気や事故によって失われた人間の機能を補完するための機械は今後いっそう普及していくことだろう。生体機能を補完するための機械はもはや別個の存在ではなく、機械の部位も含めて一個人であるといえよう。物質としての違いはあるが、身体というひとつの言葉で括られる。ここに人間と機械の境目はもはや存在しない。私の作品も同様の構造をもっている。別個に生成されたパーツは無数に組み合わせられ、独立していた部位はすべて連結し、大きく、複雑な構造をもった一つの未来都市となる。

#### あとがき

私は自身の身体体験から得た経験により、人の精神と肉体の生理との関係を自分なりに整理できるようになった。版画の複製技術を通して、機械に備わる部品と人間の器官に関する発想が膨らみ始める。機械や人体の構成と構造から発想を得つつ、私は人体と機械の関係を考え始めた。私の身体に起こった経験から、社会や人々と機械の連結まで、作品が表す対象は個人から都市にまで広がっていった。人、臓器、ロボット、機械、部品は私の作品の中で成長し、変形していく。これからは、制作技法の基盤としての版画・シルクスクリーンという媒体の特殊性を用いて、他の媒体や材料との混用より、新たな化学作用を起こし、新たなイメージの誕生を期待している。

(論文審査結果の要旨)

この論文は、左ページには作品の図版とそれに関するコメントの文を掲載し、右ページで論考を展開するかたちをとっている。左ページのコメントは作品解説というよりも、作品とともにある想念を語る文章で、しばしば詩的であり、物語的である。論文の内容との対応関係は明示されていないが、それは作品と論考のあいだの、いわばイメージにそった考察であり、作品に現れる「星」の「構築過程」について、「結末がない構成」とか「構成が永遠に止まらない星」とか述べてあることは、論文の構成にも波及しており興味深い。

論文の冒頭で、申請者はみずからの病、手術の体験について語りながら、身体が切開され、それに外部から異物が侵入するという過程を、身体と機械が合成される事態としてとらえて、これを起点に考察を膨らませていく。この異物＝機械の体験は、ただちに版画というアートの、版を作り印刷するという異物＝機械の過程に重ねられ、他の様々なメディアによるイメージの生産のあいだで捉えられるが、版画はつねに身体（有機体）とメディア・機械（無機性）との強い葛藤とともに意識されることになる。

これ以降、この論文は、未来世界・機械世界がたえず拡張される状況の魅惑や恐怖を描いてきた漫画、小説（SF）、映画を振り返って考察し、機械と人間とが相互浸透する事態を、とりわけ〈ロボットとは何か〉をめぐって考察しながら、さらに事例を長崎県軍艦島という、いわば「未来社会」の廃墟や、イタリア未来派、日本建築史におけるメタボリズム、そしてイ・ブルのような現代のアーティストにまで広げている。こうした事例に現れた未来・機械社会のイメージが、申請者の創作モチーフを情動的、想像的レベルで大いに刺激していることは、作品図版からも、よくうかがうことができる。

論文の最終部分では〈機械とは何か〉についての原理的考察を試み、最近のロボット工学の成果にまで触れて、より深く未来社会・機械世界の問題を考えようとした。申請者のすべての問題提起は、作品制作に密着してモチーフ化されていることがよく感じられるが、論考自体の展開は、さらに人文科学の諸成果を参照して、より緻密に展開することが必要と思われた。しかし論文と制作を並行的に展開する巧みな構成と、つねにモチーフの切実性を感じさせる事例の独創的展開などは高く評価した。

(作品審査結果の要旨)

柯さんの修了制作として展示された一連の作品について、作品第一副査を務めました私から私見及び判断を述べます。

彼女が執筆した博士論文「未来の機械世界の合成と分化」で冒頭に書いてあるように、美術家を志すきっかけは、十代の時の彼女自身の疾病体験がある。重篤な病と施術による臓器摘出、またその後発症した心因性による神経症である。日常的に彼女に襲いかかる痛苦と不安、恐怖は必然的に彼女をして自身の肉体や生死と向き合うこととなる。それを乗り越え、自らをレスキューするための方途として美術を選択する。さらに具体的な方法として版画、版表現を選び取る。版の特性である印刷、転写、複製などテクニカルな効果は彼女にとって単に表現上の事だけではなく、おそらく自身の身体性に深く触れて働いていると思われる。彼女の作り出す何かのパーツのような部品や機械の構造が平面の中で展開している作品「未来都市シリーズ」に自己再生化、自己増殖への欲求が見て取れるからだ。また、それらの欲求に素早く応えたり、イメージを反転させることなく再現することで異素材との複合を容易にする版種としてシルクスクリーンを使っている。原画は線を多用しているがこれは日本の漫画やアニメーションからの影響であると言う。やがて初発のモチベーションとなった自身の身体イメージは様々な方法、技術、直感にさらされながら次第にこの作家の思想を深く遠くへ外部に向けて及んでいくことになる。歴史、建築、テクノロジーへと思考の触手は伸びてゆき、そこでまた新たな制作の技法と素材に変換する行為に没頭する。そのような彼女の営為はすこぶる健康である。論文は各章が一見それぞれに独立し内容の濃度密度も様々で連繋接続は必ずしもスムーズではない。しかし彼女は描くことと書くこと、思考すること、他者、他言語に、誠

実に震える指で触れてゆこうと試みている。彼女はそのように私たちの身体や私達の棲むこの世界、私たちが生きる時間（過去、現在、未来）とはこのように危うく不安定な系をつくっているのだということを視覚的に報告しようと試みている。博士展と一緒に展示していた小品二点。本仕立ての作品とアッサンブラージュの作品は彼女の制作のキーワードである連続、連結というキーワードが頁ごとに、あるいは種々のフラグメントの接合部にごく自然に生き生きと視覚的効果を見せながら表現されているように見えたのが印象的であった。作品審査に関しては主査である三井田盛一郎先生を始め宇野邦一先生、ミヒャエル・W・シュナイダー先生、八谷和彦先生全員が修了作品を高く評価し、彼女のこれからの美術家としての更なる成長と活躍を期待した。

#### （総合審査結果の要旨）

題目にある作品と論文は、どちらも申請者である柯毓珊の身体に起こった事件を契機として始まる。美術や絵画、版画としての表現と言葉による表現は、柯毓珊にとって並行関係を持って進んできたようである。

並行関係（パラレルワールド）は、一つのキーワードとなり機械と肉体身体、絵画と版画、ロボットと人間という対の概念を見付け出す。彼女はこれを一見クロスさせ融合させようとしているように見える。しかし、マシンやコンピュータの世界と有機的な身体や肉体、生体の世界は並行的に進むのだ。このような世界の並行性は、論文の構成と執筆のプロセスにも現れる。執筆開始の段階では一般的な章立てがなく、孤立した島のように複数のエッセイが並立し、論文としての統合は最終段階となつて行われた。また、完成された論文は形式としてもユニークで、左右見開きで異なる内容、左に自身の作品図版とこの作品世界から発せられるような詩的なテキストが、右ページには本論としての論考が、配置されている。本論の部分で自作についての言及が行われるとしても、あくまでも論者としての批評行為としてあり作品そのものに交わることは無いのだ。このことは美術表現と言語の関係をモデル化していくような表現であったともいえるだろうし、版画や絵画の形式で表現される作品が、言語とは直接交わることなく、彼女の使用するところでの言語的であったといえる。

提出された作品「未来都市シリーズ 版画構成要素」は、手描きされた小さな機械パーツのようなイメージをシルクスクリーンプリントの版にすることで、無限の転写行為が繰り返され、際限のない増殖を感じさせるものである。並行世界（パラレルワールド）に展開する何かを私たちの尺度で捉えようとすれば、何ものかと交差させ、接続してみるしかない。そこでここに、ロボットや未来都市といったイメージが、交差接続される。論文には、ロボット論、メタボリズムを例に取った都市論、SF（science fiction）をめぐる漫画、アニメ、映画に関する論考が展開していく。

もう一度彼女の身体に起こった病の問題、治療としての手術やそこから連想的に広がった移植医療やSF世界とも関連づけられるクローンなどの問題に目を移してみる。現実の世界においても可能性としての身体は無限に際限なく増殖や置換が可能となる。マシンとしての無限増殖と生体身体としての無限増殖というモデルは、どちらかがどちらかに侵入し接続されての出来事だろう。論文の目論見として“ドゥルーズ”の哲学に寄り添ってみることがあった。これは必ずしも十分な展開が得られなかったし、成功はしなかった。しかし、重要な概念としての“器官なき身体”は、継続的に意識されていたようである。論文の終章で「ロボット表面を意識させる質感を支持体として、この上に機械パーツのようなイメージが結合と切断を繰り返す」ということを述べることで、彼女としての器官なき身体である「ツルツルとしたロボットの外殻」が作品イメージ（シルクスクリーンからのプリントやドローイング）の支持体として準備される。そして、この磨かれた白い表面が器官なき身体に見立てられていくプロセスが明かされることになった。

以上のように、この課程博士における博士号申請作品と論文は、ユニークであるとともに、申請者の作品内容と思考を作り上げるプロセスとしても高く評価できるものあり、審査グループは博士号取得に的確であると判断した。